

## 結章

### 1. 収穫祭と知本相撲

本論文は台湾原住民の知本プユマ（プユマの知本居住集団）で実修されている相撲を事例として、相撲をめぐる諸事象の変容の語りから民族アイデンティティ形成の問題を論じようとしたものである。

方法論としては文化人類学的フィールドワーク、歴史学的資料分析からそれぞれ文化分析をおこない、その交差から変容を明らかにする手法をとった。

知本相撲と共に、収穫祭にも焦点があてられるが、それは次の理由による。知本相撲はそれがおこなわれる収穫祭との関連においてその意味を表していること。また、収穫祭は知本文化において重要な位置を占めており、知本文化を理解する際には収穫祭は何よりも欠かせないものであるからである。

日本統治時代、原住民は特別行政区として警察の管轄下に置かれたのに対し、知本は原住民とされながらも普通行政区とされた。この影響は単に行政上の問題にとどまらず、戦後の中国化と相まって更に複雑な様相を呈すこととなった。

こうした問題関心のもとに、本研究は3つ分析視点から進められてきた。

- ① 「理蕃」政策（日本統治下の原住民に対する教化・殖産的皇民化政策）による原住民祭祀儀礼の変容、
- ② 知本の収穫祭全体としての考察
- ③ 知本相撲の変容

日本統治時代、同化、皇民化政策によって原住民の祭祀儀礼は大きく変容した。期間の短縮、神社崇拝との一体化、さらには集団移住によって祭祀「空間」を喪失した。これに対し、普通行政区であった知本にそのような変化の語りは聞かれない。

知本の収穫祭はカバラサアーン、もしくはブナラサと呼ばれ、パラクワン（男子集会所）で執り行われていた。そこでは、トウモクによるさまざまなパリシ（祭祀）のほか、青年たちによって訓練として徒競走、相撲、そして集落構成員による舞踊がおこなわれていた。

官制青年団政策によって、パラクワンのもつ伝統的社会機能が総督府機構の末端に位置づけられたのとほぼ同時期、日本相撲のローカル化がなされた。これは、在来のマリウオリウオスに「土俵」が習合されることによって、日本相撲の受容をみたといえる。この背景には知本プユマの文化・社会制度を日本のそれと比較した場合、そこには少なからず文化的類似性が存在したことが指摘できる。

また、総督府の理蕃政策においても相撲は特に重要視されていた。そのために原住民用の相撲規定を制定し、普及・奨励をはかった。これは、それまでの民族ごと、あるいは地域の枠のなかにおいて限定コードで実修されていた相撲が、日本相撲によるルールの特典化を通して対抗を可能させてゆく過程でもあった。

戦争末期の中断をはさみ、知本では戦後すぐに収穫祭は復活され、相撲も同じようにおこなわれた。しかし、知本社会の経験した二つの出来事によって収穫祭はおこなわれなくなった。パラクワンの禁止とキリスト教の受容である。これらは収穫祭の担い手集団の解体、収穫祭をおこなう「空間」の喪失を意味した。

一方、日本的文化基盤によって受容をみたキリスト教によって、宗教的祝祭としての収穫祭が催されるようになった。しかし、これは「固有伝統文化」としては認識されていない。

1990年代から政府からの働きかけを受けて、知本の原住民文化の復興と継承がなされてきた。カ地布文化としての収穫祭は、全体としてみれば「本質性」を求めたことによって「固有伝統文化」として正統化された。これに対し、収穫祭のなかでおこなわれる知本相撲は歴史的経験を通して異種混交の文化としてあることによって知本の文化としての正統性を獲得している。

## 2．知本相撲とアイデンティティ

もともと知本プユマでは組み相撲であるマリウオリウオスがおこなわれていたが。昭和6、7年（1931～1932）にマリウオリウオスから日本相撲への変容をみた。そして戦後、日本相撲が再解釈され「土着化」した姿が今日みる知本

相撲といえる。

この相撲変容には、「適応」せざるを得ないという「受容」としての消極的な側面よりも、むしろ支配状況を生き抜くために、むしろ積極的に外来の文化要素を借用したとみることができよう。そして、そこには、本質的な部分を変えることなく「変容」させることによって文化的自律性を強化し、アイデンティティ主張のために機能させたという主体的な姿を認めることができよう。また、そこには「中心—周縁」枠組みから「脱中心化と中心の再構築」へのアイデンティティの変化を読み取ることができよう。

今日の知本相撲には「土俵」という日本相撲には不可欠なコードが存在しながらも明確には意識されず、また、知本相撲が何よりも「固有伝統文化」として正統化され、アイデンティティの確認・強化・再生産がそこに組み込まれておこなわれている。よって、既に植民地主義の歴史とは切り離された、知本プユマの「文化コード」として在るといえる。

知本相撲には、知本プユマの歴史的経験がシンボライズされ埋め込まれている。そして、それをおこなう、みるという行為、すなわちこれを解釈する側によって、そこからさまざまな色が鮮やかに映し出される。知本相撲は知本プユマの歴史実践、そして卡地布文化における歴史的経験のプリズムといえよう。

(完)